

視

点

寺報第十六号の「あれこれ抄」の中で、道路を横断する際の諸注意を子供さんに、シャガミこみながらなさっている母親のほほえましい光景に対し、寸感を記したことがあります。今号ではこの光景に関連して種々考えてみることにします。

私たちは、私が見える範囲（視界）のものは、他の人も全く等しく見えるものだと錯覚しがちです。背の低い幼児の視界と、私たち大人の視界とは当然、見える世界は異なるわけですが、それに気づかず、大人の感覚、私の基準で子供に対処してしまいがちです。

子供の視点にたつて自動車を見れば、車は大きな輪っかのある鉄のかたまりの化け物に見えるかも知れません。しかし、私たちは子供のそのような認識には気づかず、又、無視して私の見た感覚で子供に対応し、注意し子供が理解したと早合点してしまいます。

このようなケースは、横断歩道場面だけに限らず、私たちをとりまく諸環境の中で広く存在します。親子という温室での限られた社会構造の中では、一方的に親が子供の方に歩みよりシャガミこむのが常ですが、一般社会の中で、シャガムとは何かを考えたいものです。

私たちは常に「私」が基準です。他を私に合わせたがりです。合わないと他を責め、私を正当化し、無理にでも合わせようとし、その過程で色々問題を生じることの多いことです。

シャガムとは換言すれば、視点を変えらるということでしょう。私を離れ、こだわらず、相手を認め、相手の立場で見直すことです。

浄土真宗の教えは、他力（本願力）の信順であります。その要は、自力の心（こだわり）をふりすてて、一心に如来をたのむことで、その芽ばえ、出発点は日常生活の中で、視点を変えて、見直すことから、生れてくるのではないかと思うことです。